



# からこかぎ

第27号 令和元年11月5日(火)発行

唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会

〒636-0247 奈良県磯城郡田原本町阪手233-1 唐古・鍵考古学ミュージアム内

☎090-9257-3688 Email: karakokagijimukyoku@swan.ocn.ne.jp

## 遺物紹介 シャーマン像

会報編集グループ

### 1 はじめに

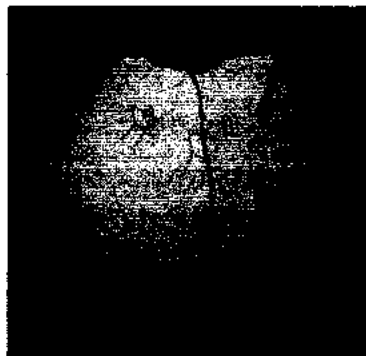
今回は、ミュージアム第二室の絵画土器のコーナーに展示してあるシャーマン像を紹介します。昭和61年に天理市庵治町で養護学校の建設が計画され、橿原考古学研究所が第1次調査で出土した絵画土器を基に作成された人形です。出土した絵画土器（以下、「当該土器」という）は、橿原考古学研究所が保管しています。

### 2 清水風遺跡第1次調査

調査は、校舎・体育館の基礎部分にあたるエリアを中心になされ、3面の遺物包含層が確認されました。当該土器は、最下層の中期遺構面で検出された自然河道（南→北 幅6~12m、深さ1~1.3m）の洪水堆積層から出土しました。当該土器は、磨耗も少ないことから洪水による堆積と推定され、近接する集落域からの流れこみと思われます。また、そこでは、弥生中期中葉~末葉の土器が多く報告されています。

### 3 絵画土器

洪水堆積層からは、鈕・舞・饕の表現がある銅鐸形土製品も3点出土していますが、なんとといっても50点（破片を含め）を越す絵画土器に驚かされます。出土した絵画土器は、短径壺の肩部に描かれるものが多数を占め、家屋・シカの表現が多いと報告されています。判明している線刻絵画の内訳は、家10点、シカ8点・弓矢1点・魚1点・トリ1点のほか後述する人物1点と舟2点です。家屋には、高床建物の梯子（3点）や円形の屋根飾り（2点）といった唐古・鍵遺跡で見られる通用の表現もみられます。また、描かれたシカの中には、2頭の雄鹿と矢と家が描かれ、鹿が逃げているような表現もみられます。



さて、当該土器（右上・インターネット画像）ですが、右端の大きく描かれた人物を含め3人が描かれています。報告書では、「右端の人物は台形の体部から両手を差し上げ、右方は三本の指を広げる。頭部には帽子か、笠をかぶる。胸部には鹿らしき動物が描かれ、袋状の袖がつけられている。左方には小さく表現された人物が2人描かれるが両者共腕は描かれない。」と記述されています。左側の二人は逆台形の胸部に円形の頭部が描かれ、右側の人物は頭部が三日月形の突起となっています。

銅鐸絵画の作画例にならいますと、○は男性・▽は女性となり、左側二人は男性・右側は女性で、かつ全体の構図より女性司祭者（祭祀をおこなう人物）と想定されます。橿原考古学研究所は、「鳥装の巫女」と命名しています。先日（2019年10月9日）、田原本教育委員会が新聞発表した清水風遺跡で出土した絵画土器には、乳房が描かれた鳥装の人物が表現されていて、そこからも女性であることが裏付けられます。

なお、胸部のシカについては、足が2本で鹿の口に斜めに横切る線が描かれていて、それを魚を銜えた絵とみて、シカでなくトリとする意見もあります。

#### 4 鳥装の巫女

女性が両手を天に差し上げる表現（前頁 模写絵・インターネット画像）は、農作物の豊穰儀礼や狩りの獲物の増進儀礼また病気の平癒や蔓延防止などさまざまなパターンをもつ呪術的儀礼行為だと思われます。それらの儀礼にあたっては、「霊」を呼ぶための衣装（一時的転換）を用いたということもわかります。

当該土器の線刻文様については、多様な見方がありますが、注目したいのは、女性が左側の男性より大きく丁寧に表現されている点です。それは、集落（共同体）の中でも、他の構成員とは異なった特別の存在であったことを示しています。

「鳥装の巫女」という特別な存在からは、東南アジアやアフリカをはじめ世界各地の民族事例にみられる「トーテミズム」と命名されるアニミズムが想起されます。それは、個人や集落が動植物種（クマ・シカ・トリなど）や自然物（雨・雷など）との間に親縁関係を認め、それらを祭祀の対象とするものです。その祭祀行為は、地域集団の特定の場所（トーテムセンター）で行うとされています。トーテミズムは、人間と自然との一体性が前提となっていて、採取狩猟社会の縄文時代にもその自然観がみられます。

一方、類似のアニミズムに、「シャーマニズム」があります。それは、シャーマンと呼ばれる宗教的職能者を中心とするアニミズムで、シャーマンがトランス状態に陥り、その魂が霊的存在と接触・交信（憑依や脱魂）し、託宣・祈禱などをおこなうものです。農耕社会の成熟に伴い専門的職業分化が進行した際に出現したといわれています。トーテミズムとシャーマニズムの違いは、前者は集落内の祭祀の色彩が強いのですが、後者は、属人的で世襲化されています。

宗教の原初的形態は、「霊的存在の信仰」で、アニミズムといわれています。それは、当時の自然環境や社会・文化を反映したものと考えられています。畿内第IV様式の特徴をあらわす当該土器の評価は、個々人の弥生時代中期後半の歴史観によって、その評価は分かれるところです。



#### 5 準構造船

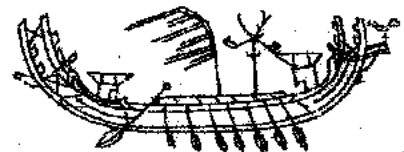
最後に、先述したゴンドラ型の船を描いた絵画土器を報告します。2点出土していますが、1点は、（上 模写絵 ネット画像）船の全容が線刻され「樞は36本と復元され、漕ぐための樞が左右17本、舵取用の樞を船尾に2本持ち、漕手座を兼ねた梁を持つ準構造船で中央に帆柱を備え、



外洋に耐え得る船で全長20mに復元できる」と報告書に記載されています。縄文期には、切断した丸太を削り貫いた丸木舟が出土していますが、準構造船は、丸木舟を船底にして、舷側板や縦板などの板材を組み合わせた船です。類似の絵画土器は、唐古・鍵遺跡第1次調査の北方砂層からも船が線刻された土器

（上 模写絵 ネット画像）が出土していて、操る3人の人物と船が描かれています。船はゴンドラ型で、右端は細く、左端がやや太く反り上がるように曲線で描かれています。樞

は、下端が三叉になった5本の垂直線が船体を貫き、その内2本は左側の人物と連なっています。さらに、第1次報告書ではそのほかにも所蔵者不明の絵画土器が2点出土し、内1点が舟と推定できる優品（右模写絵 ネット画像）として紹介されています。いずれにしても、日本海側の長距離交易の情報は、唐古・鍵遺跡や清水風遺跡周辺にも伝わっていたことが推測できます。



## 遺跡紹介 津山市沼遺跡 ～ ムラの単位集団

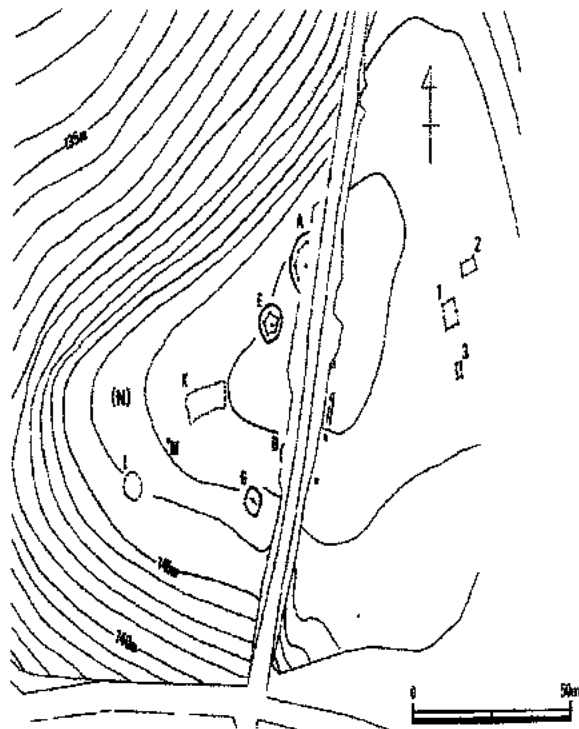
弥生ウォーク世話人グループ

## 1 はじめに

今回は、岡山県津山市の沼遺跡を紹介します。一昨年「吉備バス旅行」では行けなかった遺跡です。津山市は、岡山県の北部に位置し、山地の多い美作の中でも平野面積の広い津山盆地にあります。遺跡は、東西に長い小丘陵にあり、1951年（昭和26年）に、切通しから大小2箇所の竪穴住居切断面（黒色土の落ち込み）が発見され、その翌年の発掘調査以来5次にわたる調査がなされました。特に、沼遺跡が、学史的に著名なのは、弥生集落論の中で困難とされる社会構造の解明を、「単位集団」と「共同体」という基本概念で説明されたところにあります。発掘を指導された近藤義郎先生は、「当時の集落は中心住居をもつ数件からなる住居群（単位集団）で構成され、その（周辺の）複数集落が共同体的結合にあった」と集落構造を復元されました。沼遺跡の発掘成果は、1959年の考古学研究会で発表され、集落や地域社会の社会構造（社会関係）の解明の嚆矢となりました。以下、沼遺跡を紹介し、併せて唐古・鍵遺跡の住居群を確認します。

## 2 沼遺跡

津山盆地では、発掘調査が進んでいて、現在40を越える弥生遺跡が発見されています。弥生前期～中期前葉は僅かですが、中葉以降は集落遺跡は増加し、沼遺跡（標高145mほど）からは弥生中期中葉から後期前半の遺構・遺物が確認されています。遺跡は、先ほどの切通しを境に東西地区に区分され、西地区（1次調査）では、火災をうけた住居1棟（右図A）を含む4棟の竪穴住居（B・G・E）が確認されています。また、同じ西地区頂部（2次調査）では、竪穴住居1棟（L）と長方形竪穴遺構1棟（K）とピット1基（M）が検出されました。一方、東地区（3次調査）では、丘陵を横断する溝と長方形の高床住居とみられる柱穴群が発見され、その後の調査を含め3棟の高床住居（1・2・3）が検出されています。また、遺跡からは、土器・石器のほか鉄器（ヤリガンナ）1点とガラス玉3点が出土しています。



## 3 集落構造（単位集団）

以上のとおり、沼遺跡では、西には長方形竪穴遺構を囲むように半円形に大小の竪穴住居があり、30mほどの離れた東には浅く狭い溝で区画された高床倉庫が配置されています。注目されるのが、切通し断面で発見された大型の直径8.4mほどの竪穴住居で、そこからはヤリガンナとガラス小玉が出土し、「家長世帯」と判断されています。また、丘陵中央部に位置する竪穴長辺9m、短辺3.6mの竪穴遺構は、狭い幅員を考慮して協同作業場（炊事施設）と考えられています。

このように、全掘削された沼遺跡では、竪穴住居4、5棟と倉庫・共同作業場から構成される住居群が、立地条件・水系・広がりなどから一定程度の独立性を持った経営・生産・消費の基本単位（単位集団）であったとされています。今日、弥生社会の基礎的な単位を「単位集団」とする考え方は、人によって表現に違いがありますが、合意を得て継承されています。

#### 4 地域構造（共同体）

一方、沼遺跡周辺では、半径2～3kmの範囲に太田十二社遺跡（左図5）など同時期の単位集団で構成された



遺跡が複数あり、半径10kmとなると数多くの弥生集落が確認されています。ちなみに、沼遺跡（左図1）の南50mにある沼E遺跡（中期中葉～後期前葉 左図2）からも、大小の竪穴住居・長方形竪穴遺構・高床倉庫・小規模の墓域が検出されています。

この地域の稲作伝来の時期は、中期中葉ですが、これら周辺の単位集団が稲作などの協同作業や祭祀的儀式などを通じて複数結合し、大規模集落や地域社会といった「共同体」を形成したとされています。

その後、「共同体」の論議はさらに進展し、稲作などの協同労働から誕生した地域共同体（地域集団）は、水利や土地開発などの争い・調整を通じて大規模地域集団（クニの時代）へと拡大・進化し、その過程で農業生産力の拡大と私有財産の蓄積が進行し、階層分化を促進して古墳時代に至ったとし、古代国家の成立過程にも言及しています。（近藤旧説）

#### 5 唐古・鍵遺跡

唐古・鍵遺跡の場合、住居址の検出例は多くはありません。代表的な遺構を各地区で確認します。まず、中央区では、第98次調査の中期中葉の竪穴住居址が、南地区では第65次調査の中期の竪穴住居址が検出されています。また、西地区では、第11次調査で、前期後半の建物跡が検出されましたが、中世遺構により削平されていて詳細は不明です。なお、第22次調査地点では、周囲に柱穴群をもつ前期の掘立柱建物跡が検出されています。また、東地区では、第83次の古墳期初頭（弥生終末期）の竪穴住居址が検出されていますが、報告書では記述がなく不明です。田原本町教育委員会に在職されていた豆谷和之先生は「弥生時代の考古学8 奈良盆地唐古・鍵遺跡」（同成社）において、第98次調査で検出された竪穴住居が半径1.5m程度の5～6㎡（2～3人の世帯の居住面積）であったことから、一般的な遺跡内の住居跡（世帯）と指摘しています。これは、遺跡内の居住と生活の基本単位は、血縁関係を重視した「世帯」（核家族）で構成され、日常生活の生産・消費、生殖・育児、家財道具や社会的地位の継承、祭祀などをおこなう基本単位であったことを示しています。これは、沼遺跡で提起された単位集団を構成する「世帯」に相当するものと思われます。なお、唐古・鍵遺跡内で、柱穴群が報告されている調査地点のなかでも解析が進んだ西地区の第79次調査の柱穴群は、最低でも9棟程度（同時存在）の中期中葉の竪穴住居群とされています。そこでは、半径1.4mから最大2.36m程度の第98次と同規模の竪穴住居が復元でき、後述する西地区の世帯共同体（中期中葉）の竪穴住居群と考えられます。

また、同書では、南地区の第65次調査で検出された分岐小溝が複数の竪穴住居と結ばれていることに着目し、弥生中期段階の集落像を「小溝を共有する世帯共同体」としています。これは、血縁集団（祖父母・両親・兄弟・オジ・オバなど）に属する複数世帯を含んだ親族共同体の存在を実証的に示したものとと言えます。その単位は、縄文時代の移動性の高い採集生活の小規模の核家族（両親と子）の形態と異なり、稲作などの生業パターンを支える大家族に相当するものと言えます。これも、沼遺跡の単位集団の範疇に属すると思われます。

最後に、唐古・鍵遺跡も沼遺跡と同様、単位集団（世帯共同体）の範囲を超える資源の獲得・分配や安全保障や祭祀や道徳的サポートなどの社会的な協力関係は不可欠であったと思われます。今後は、遺跡各地区内の単位集団や周辺の集落さらには地域社会との連携に着目した弥生集落の社会構造の解明が求められ、ますます遺跡の発掘に期待が高まります。

### 第30回 弥生ウォークのご案内

1. 題 目 : 南山城の弥生遺跡(2)

2. 日程等

日 時 : 令和元年11月30日(土) 午前10時00分~14時30分

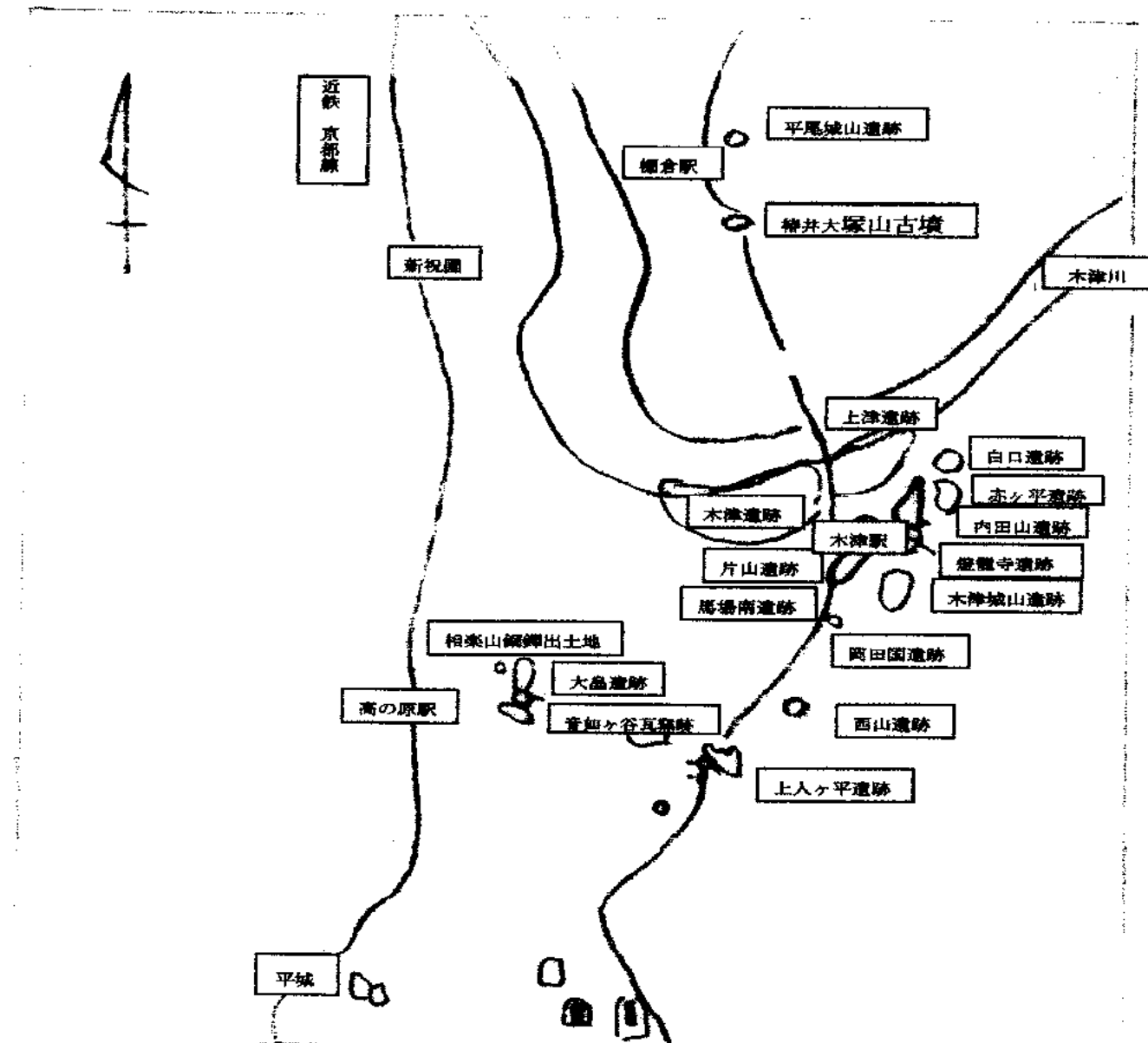
集合場所 : 近鉄線京都線 高の原駅改札口

進 行 : 報告は、弥生ウォーク世話役がおこないます。

3. 参加対象者 : 支援隊会員、ミュージアムガイド、遺跡ガイドおよび参加希望の方(申し込み不要)

4. 行程

近鉄 高の原駅(出発) → 相楽山銅鐸出土地 → 大島遺跡 → 上人ヶ平遺跡 → 西山遺跡 → 岡田園遺跡 → 馬場南遺跡 → 城山遺跡(昼食) → 燈籠寺遺跡 → 赤ヶ平遺跡 → 白口遺跡 → 内田山遺跡 → 片山遺跡 → JR木津駅 → (椿井大塚山古墳) → JR柵倉駅 → 三角縁神獣鏡特別展示室(山城図書館) → 柵倉駅(解散)



弥生ウォークのご案内 ～南山城の弥生遺跡(2)

弥生ウォーク世話人グループ

第30回弥生ウォークは、平成30年春に訪れた南山城の弥生遺跡の続きです。前回は、南山城地域の城陽市周辺の弥生遺跡でしたが、今回は南山城地域南部の木津川市を中心に弥生遺跡を訪れます。木津川は、三重県西部の青山高原を源流として伊賀川として西に流れ、今回の訪問地付近で北に流れを変えたのち途中で宇治川、桂川と合流しさらに琵琶湖から流れ出る淀川と合流し、大阪湾に至ります。まさに、南山城は、水運を含め交通の要衝といえる地域です。

この地域の弥生文化の伝播は、弥生前期中葉とされています。今回訪れる燈籠寺遺跡から出土した「甕」がそのルートを示しています。畿内I様式中葉の甕の胎土が生駒西麓の粘土であったことから、河内からの山越えか、淀川をさかのぼる木津川の二つのルートが想定されました。最近では、乙訓など他地域の生駒西麓土器の出土例が少ないことから山越えルートが有力といわれています。

山城地域では、弥生時代前期は、淀川・木津川を遡上するように集落が拡大し長岡京市雲宮遺跡、中期には長岡京市神足遺跡や久御山町斎当坊遺跡などの大集落もみられますが、後期になると木津川市城山遺跡や京田辺市天神山遺跡のように丘陵部のムラが多数誕生しました。特に木津川などを望む丘陵には、高地性集落が多く誕生しています。今回は、高地性集落に着目し、南山城地域の後期から終末期の集落動向を確認します。

出発地の高の原駅は、佐保丘陵の古称とされる「高野原」にちなんで命名された駅ですが、標高は、既に56mほどです。

1 相楽山銅鐸と大島遺跡～高地性集落の祭祀と生業

最初に、法華寺の創建瓦を焼いた「音如ヶ谷瓦窯（おんじょがたにがよう）」を訪れます。史跡指定がなされ、遺跡公園として整備されています。標高49～52mの遺跡ですが、弥生中期中葉の土器も出土しています。

次いで、相楽山（さがらかやま）銅鐸の出土地を訪れます。昭和57年の平城・相楽ニュータウン造成地から出土しました。相楽山銅鐸（左 インターネット画像）は、高さ40.5cmの六区画袈裟摺文銅鐸で、扁平鈕式と分類されています。銅鐸出土地から谷を挟んで東200mに大島遺跡があり、銅鐸出土地とその比高差は、8mほどです。300m北

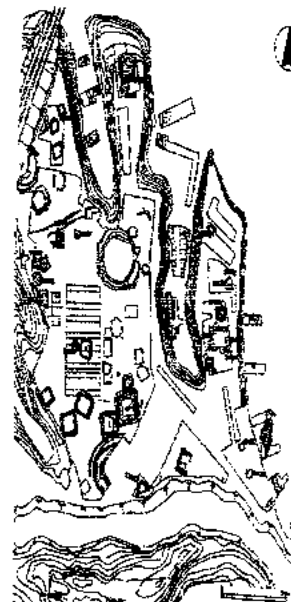
には、さきほどの音如ヶ谷瓦窯があり、周辺は東西100m南北200mが弥生時代の遺跡範囲とされています。大島遺跡からは、堅穴住居3棟と方形周溝墓1基（右下ネット画像）に加え土坑と多数のピットが検出されています。直径8mの円形の堅穴住居や一辺12mの方形周溝墓の周溝からは、中期後葉を中心に土器や各種の石器が出土しています。时期的にも符合し、相楽山銅鐸の祭祀の母体集落と考えられています。近畿地方では、中国・四国に若干遅れて、中期中葉以降に高地性集落が出現するとされ、ほぼその時期の高地性集落といえます。出土石器から、集落の生業を確認できます。石包丁（16）、打製の石鎌（21）石槍（3）石錐（5）、大型蛤刃石斧（2）、叩き石（1）、紡錘車（1）砥石（4）、磨製の石剣（5）・石戈（1）・石鎌（1）が出土しています。特徴は、石包丁（粘板岩製）の割合が高く、平地の同時期の遺跡と同じですが、意外なことに堅果類の依存度は低いことがわかります。一方、武器形石製品の割合が高く、丹後・但馬・丹波など近畿北部の祭器具と同様の傾向を示しています。遺跡は、中期後葉には終息しますが、引き続き北方600mの曾根山遺跡からは、後期～庄内期の土器が出土しています。なお、



は終息しますが、引き続き北方600mの曾根山遺跡からは、後期～庄内期の土器が出土しています。なお、大島遺跡からは、奈良時代の掘立柱建物や土坑が検出されていて、音如ヶ谷瓦窯の工人の住居と考えられています。

## 2 上人ヶ平遺跡～高地性集落の防御性

次いで訪れる上人ヶ平（しょうにんがひら）遺跡からは、弥生後期の竪穴住居1棟、方形周溝状遺構1基・円形周溝状遺構1基、土坑2基が検出されています。遺跡は、標高45m（平地と比高差20m）の丘陵先端の平坦面に位置し、主尾根とそこから派生する3本の支尾根に遺構（右図 弥生遺構図）は分布しています。弥生期の遺構は、北に張り出した尾根の先端で検出され、木津川を見下ろす位置にあります。かつては、高地性集落の防御性を重視し、その眺望の良さを根拠に通信機能（狼煙）が想定されていました。しかし、竪穴住居中央に円形土坑と、それに連なる溝状遺構があり付近からは台石や炭化材が出土しており、作業場の性格をかねる住居と考えられます。遺跡は北側の鉄道工事により壊されていて、さらに複数の竪穴住居の広がりが見込まれています。遺跡では、5世紀後半～6世紀前半までに19基の古墳が造られ、その後8世紀前半には遺跡を含む市坂瓦窯があり平城宮大膳職の瓦などが作られています。現在、遺跡は、古墳群が復元され遺跡公園となっています。



## 3 城山遺跡と周辺遺跡～高地性集落の墓域と流通網

次いで、西山遺跡、岡田国遺跡を確認し、馬場南遺跡を経て城山遺跡に至ります。西山遺跡からは、後期後半の土器や竪穴住居が出土しています。また、岡田国遺跡

からは、地域では数少ない旧石器時代のサヌカイト製の彫器が出土しています。最近注目されているのが、馬場南遺跡です。遺跡からは、南西方向に伸びる支尾根から一辺10mの方形周溝墓1基とその周辺から土壙墓4基、土器棺墓1基が検出され、中期後半以降の墓域であったことがわかりました。また、遺跡からは、仏堂跡や塔跡が検出され、万葉木簡なども出土し、遺跡が「神雄寺」と呼ばれた国家的仏教法会をおこなった寺院跡であることがわかり、現在も神雄寺跡の発掘がなされています。



さて、城山遺跡（左写真 木津川を望む遺跡）ですが、後期前半に突然出現し古墳前期まで継続する遺跡です。弥生後期を通じ、竪穴住居45基、段状遺構21基が検出されましたが、発掘は集落

域の半分程度ですのでさらに広がることを予想されています。但し、同時存在の竪穴住居は、10棟に至らないと推定されています。また、後期前半の台状墓が5基と集団墓であることを裏付ける複数の埋葬施設が検出されています。高地性集落の場合、防御性を重視した一過性の遺構と評価され、墓域は並存しないと考えられていましたし、実際、あまり検出されていませんでした。しかし、この地域は先ほどの大島遺跡にも見られるとおりの住居跡に近接した墓域を形成しています。

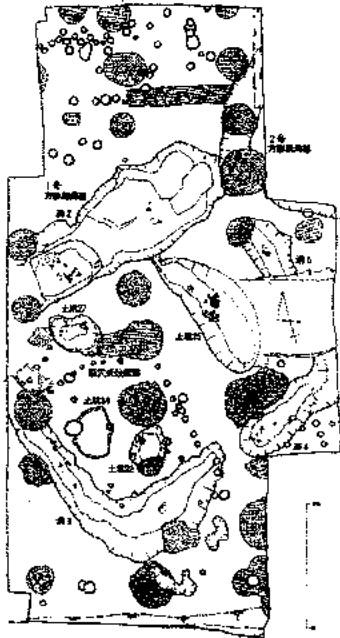


竪穴住居は、標高94mより高い位置が選ばれ、遺跡範囲は南北320m・東西130mと想定されています。また、北西に伸びる尾根より検出された方形台状墓の埋葬施設から浮彫式獸帯鏡の破鏡（上右写真）が出土しています。また、竪穴住居からは朱が付着した素文鏡（上左写真）も出土しています。高地性集落からは、金属器を

含む特殊遺物の出土が多く、広域の物資の流通に積極的に関わっていたとの指摘がありますが、それを裏付ける遺跡からの鏡の出土です。また、方形周溝墓と異なり、近畿北部に多くみられる台状墓（尾根の高まりを方形に整える）の築造からも日本海側との広域交流が見て取れます。

#### 4 燈籠寺遺跡周辺～高地性集落の動態

城山遺跡の谷地形を挟んだ東側の木津川を見下ろす丘陵縁辺部に、赤ヶ平遺跡（標高50m・比高差20m）と白口遺跡があります。赤ヶ平遺跡からは、弥生前期の石器や剥片廃棄土坑が検出され、中期には円形の竪穴住居1基が検出され同時期の土器や石器も出土しています。白口遺跡からは、後期の円形竪穴住居1棟と溝が検出され、あわせて同時期の土器や石器も出土しています。また、赤ヶ平遺跡と谷を挟んだ丘陵上の対面には燈籠寺遺跡、内田山遺跡があります。しかし、現地では木津高校の敷地内で、燈籠寺遺跡（高校管理等など）と赤ヶ平遺跡（実習農圃地）と内田山遺跡（学校敷地）が隣接しています。



弥生中期中葉から後期の燈籠寺遺跡（標高53～55m 左遺構配置図）からは、弥生中期の直径5mの円形の竪穴住居1棟とその跡に築造された中期中葉の1基を含む方形周溝墓2基と土坑・焼土坑・柱穴などが検出されています。竪穴住居からは、叩き石・台石も出土し石器製作の痕跡も確認されました。

また、内田山遺跡（標高54m）からも、弥生後期の竪穴住居18基が検出されています。遺跡内の竪穴住居の推移は、円形(5)→隅丸方形(3)→方形(10)住居と変化し、規模も小型化していきます。その変遷は、同時期の他地域の平地の

遺跡の動向と同様です。

前期の赤ヶ平遺跡では、温暖期に相当する中期の遺構は未検出ですが、周辺地域では、後期になると、城山遺跡（後期前葉）から、一体遺跡と考えられる燈籠寺遺跡・内田山遺跡（後期中葉）と小規模集落の移動が読み取れます。木津駅周辺の圃場整備事業に伴う事前調査で発見された片山遺跡も後期の集落遺跡です。

なお、後期末になると、平成30年に訪れた木津川の沖積平野にあたる塚本遺跡、塚本東遺跡、下水主遺跡などで集落活動が活発化しますが、今回の弥生遺跡周辺では、沖積平野での遺跡は未発見です。

その後、古墳時代になると、大和地域との関わりが注目される山城町椿井大塚山古墳や訪れた久津川車塚古墳など大規模な前方後円墳が築かれます。

#### 5 三角縁神獸鏡特別展示室

平成30年に訪れた上大谷墳丘墓では、夔鳳（きほう）や飛禽（ひきん）鏡や龍（だりゅう）鏡、芝ヶ原古墳（墳丘墓）では四獣形鏡、長池古墳下層（墳丘墓）からは重圈文鏡が出土し、城陽市「五里ごり館」で実見しました。今回は、車窓から椿井大塚山古墳を確認した後、32面（レプリカ）の銅鏡が展示されている山城図書館内の「三角縁神獸鏡特別展示室」を訪れます。因みに、椿井大塚山古墳は、古墳時代前期前葉の首長墓とされています。昭和28年のJR奈良線の拡張工事の際、竪穴式石槨が発見され、調査により30数面の三角縁神獸鏡のほかに、後漢鏡や画文帯神獸鏡など4面の中国鏡や素環頭大刀や甲冑など鉄製品も出土しています。

木津川を歩く弥生ウォークは、今回が最終回となります。晩秋の山城の高地性集落をめぐるなが、木津川の弥生集落の変遷を改めて確認したいと思います。

（編集委員）

東 治雄 井上知章 植田洋高 谷口敬子 福島道昭 藤原隆雄 万徳順一 宮川真由美